

中・四国アメリカ文学会会報 No. 45

THE CHU-SHIKOKU
AMERICAN LITERATURE SOCIETY
BULLETIN No. 45

中・四国アメリカ文学会
June 2006

目 次

中・四国アメリカ文学会第 35 回大会（会場：愛媛大学）要旨

[研究発表]

1. Horatio Alger, Jr. の *Tattered Tom* における浮浪少女
..... 本岡 亜沙子 2
2. Keats と Faulkner——異教的世界と Cold Pastoral について
..... 川口 千富美 3
3. Toni Morrison の芸術とポリティックス
——*Beloved* とオペラ *Margaret Garner* を中心に
..... 森 あおい 4
4. “Hawthorne and His Mosses” における “blackness” の二重性について
..... 藤吉 清次郎 5

[特別講演]

- アメリカン・ゴシックと「不気味なもの」..... 折島 正司 6

[シンポジウム]

- 極西部時代と Mark Twain
..... 司会 市川 博彬 7

1. ダブル・クロス・ゲーム
——1860 年から 1869 年の Samuel L. Clemens 辻 和彦 8
2. *Roughing It* 試論
——笑いの変質と exile の想像力 水野 敦子 9
3. Mark Twain の初期作品について
——ジャーナリストから作家へ..... 大宮 健史 10
4. 金と権威と書くことと
——初期作品における書くことの重要性..... 和栗 了 11

- 平成 17 年度活動報告..... 12
平成 17 年度会計報告 16
中・四国アメリカ文学会会則..... 18
会員名簿..... 20
編集後記..... 新田 玲子 32

中・四国アメリカ文学会第 35 回大会

研究発表・特別講演・シンポジウム発題要旨

研究発表 1

Horatio Alger, Jr. の *Tattered Tom* における浮浪少女

広島大学（院） 本岡 亜沙子

Horatio Alger, Jr. (1832-99) は *Ragged Dick* (1868) を始めとする貧しい少年の立身出世物語を描いた大衆作家のように見なされるのが一般的であるが、実は少女を主人公とした小説を少なくとも四編執筆している。その内、三作は「男は外、女は内」といった伝統的家父長制度に則った物語と言えるが、1871年に出版した第四作目の *Tattered Tom; or, The Story of a Street Arab* だけは以前の作品とは趣が異なり、その中にはスラム街の道路掃除人として、またある時は新聞売りとして働く少女 Jenny (ニックネームは Tom) が登場する。しかし、結局 Tom はジェントルマンに気に入られ、そしてラストシーンでは生き別れた金持ちの母と再会することで金持ちへの階段を駆け上がっていき、レディーとして成長していく。つまり、本作品も「ボロから金持ちへ」というお決まりの成功物語の枠にはまった話なのだが、それにしても何故アルジャーは突然浮浪少女を描こうと思ったのだろうか。

Alger は現実社会の子どもたちを小説中で描くことにこだわり続け、その作品を世に出すことで社会改革を目指した作家である。本作品も 19 世紀後半の街中にあふれる浮浪少女に目を付け、彼女達の生活を描いたものであるが、しかし、彼が作品中に描いていないもの、もしかすると描くのを敢えて回避したものが多くあるのではないだろうか。本発表では、その疑問に対して史実に基づく回答をしていくことで、当時の子どもの状況や彼らを取り巻くアメリカ社会と、その社会を克明に描いたはずの Alger 作品との間にいかにズレ（ギャップ）があるかを解明することを目的とする。

Keats と Faulkner

——異教的世界と Cold Pastoral について

福岡大学（非常勤） 川口 千富美

1919年、*L'Après-Midi d'n Faune* を *The New Republic* に発表したのは、Faulkner が 21 歳の時であった。その 5 年後には詩集 *The Marble Faun* を自費出版し、1916 年から 10 年間で、量的にも内容的にも重要な詩作の大半を行っている。この事実を踏まえて Faulkner の文学歴を振り返ると、「私は挫折した詩人です」と語った彼の言葉には、表向きは自嘲的な表現の裏に見え隠れする屈折した深い思いを読み取ることができるし、彼が創作活動の初期において詩人としてたつことを考えていた、ということも当然察することができるだろう。Faulkner の詩風にはイギリス・ロマン派やフランス象徴派の詩人たちへの傾斜が明らかに見て取れるが、初期評論の中で Keats に深く感銘を受けたことに言及しているとおり、Faulkner の詩の幾つかには Keats の影響が感じ取れるものもある。一見、それは詩の本質や詩形に関わるものというより、そこで扱われている“material”の問題だと思えるが、Keats と恋人 Fanny Brawne との関係に Faulkner と Estelle のイメージを重ね合わせると、短い生涯の中で美への執念を燃焼させた Keats への尊敬の念と激しい芸術志向への賛同とが浮かび上がってくる。

Keats は *Endymion* で異教神 Pan への讃歌を謳い、主人公 Endymion の分身ともとれる Pan 像を多面的に描き出している。Faulkner もまた *The Marble Faun* 及び初期詩篇の中で牧神 Pan を頻繁に登場させ、ことに前者においては、冷たい石に閉じ込められた大理石の牧神の目を通して、牧歌的な世界に暗い影を投げかける死のイメージを描き出している。本来牧神 Pan の躍動の場は「豊饒」の原理が支配するアルカディアの世界であり、精神と肉体とを分裂させた二元論的なキリスト教以前の世界である。Faulkner は元来の Pan 像に死の想念を絡ませ、アルカディアを超脱した Pan のイメージを色濃く打ち出している。Keats の Pan も *Sleep and Poetry* 及び *Endymion* から *The Fall of Hyperion* に至る過程において、陽気で好色なイメージから孤独な様相を帯びたものへと変貌していく。

本発表では、両者が異教的世界をどのように取り込み詩作品に反映させたのかを中心に、その類似性、間テクスト性を探るものとする。

Toni Morrisonの芸術とポリティックス ——Beloved とオペラ Margaret Garner を中心に

広島女学院大学 森 あおい

Beloved (1987) は、Toni Morrison がランダムハウス社勤務時代に、黒人の歴史のアンソロジーとして企画された *Black Book* (1974) の編纂をしていて発見した新聞記事をもとに書かれている。この記事は、逃亡奴隷、Margaret Garner の子殺し事件を報じるものであった。Margaret は我が子とともに逃亡して捕らえられたとき、子供たちを奴隷の身分に戻すくらいならいっそのこと殺してしまったほうが良いと考え、子供の一人を殺したのである。しかし、Margaret は殺人罪ではなく、奴隷主の財産である奴隷の子供の窃盗という罪で訴えられる。新聞記事にはその Margaret Garner の似顔絵が掲載されていた。Morrison は、Margaret の似顔絵から彼女の内面を想像し、母親の人間性を剥奪して子殺しに迫りやっった奴隷制への批判を込め、*Beloved* を著したのである。

小説 *Beloved* は、Morrison と作曲家 Richard Danielpour とのコラボレーションで 2005 年に *Margaret Garner* というタイトルでオペラ化され、デトロイトを皮切りに、シンシナティ、フィラデルフィアで公演され、好評を博している。だが、この作品の上演にあたっては、*Beloved* で Sethe の主人として登場する Garner 氏のモデルとなった Archibald Gaines の子孫などから、猛烈な反対を受けた。にもかかわらず、Morrison はオペラ化を実現するが、この作品をオペラにする意義はどこにあったのか。

2005 年 7 月にオハイオ州シンシナティで開かれた Morrison 学会では、このオペラの公演や、実際に Margaret Garner が暮らしていたメイプル・ウッド・ファーム見学がプログラムに組み込まれ、Morrison の *Beloved* を多角的に検証する資料が提供された。本発表では、これらの資料も紹介しながら、*Beloved* と *Margaret Garner* の芸術性と、今日でも存在する奴隷制にまつわるポリティックスについて、オペラという媒体を用いることの意味を考えながら、検討していくことにする。

“Hawthorne and His Mosses” における

“blackness” の二重性について

活水女子大 藤吉 清次郎

Herman Melville の “Hawthorne and His Mosses” (1850) と題するエッセイは本格的な Hawthorne 論としてばかりか、ヨーロッパ文学に対するアメリカの文学の独自性を訴える論考としてもよく知られている。その中で Melville は Hawthorne のなかにある “the power of blackness” に惹かれ、彼の作品が Shakespeare のそれに匹敵すると絶賛した。

だが、このエッセイで気になるのは、雑誌に掲載された際、著者名の欄には “By a Virginian Spending July in Vermont” と記され、著者である Melville の名前が伏せられていたことである。なぜ北部人の Melville が南部人を装わねばならなかったのか。もちろん、これまで数多く論じられてきたように、そうした設定とした主な理由として、南部人が北部人作家の Hawthorne をアメリカの国民作家として祭りあげることによって、アメリカの文学的なナショナリズムをアメリカ人読者全体に訴えかけることが挙げられるだろう。「ヤング・アメリカ」の運動に加担していた Melville の立場を考えると、彼がアメリカの文学的なナショナリズムへのこだわる理由は十分理解できるし、この点では議論を挟む余地はないだろう。

しかし、このエッセイが発表されたのが 1850 年、つまり「逃亡奴隷法」が可決され、アメリカ社会が黒人奴隷問題で大きく揺れていた時期であることは無視できない。当時の社会状況を念頭に置けば、例えば南部人が奴隷制廃止を強く訴えるような北部人作家を絶賛することは考えられないだろう。つまり Melville は奴隷制に対する Hawthorne の立場を十分意識した上でこのエッセイを書いたと思われるのである。

本発表では、従来文学的な見地から捉えられてきた “Hawthorne and His Mosses” に、当時の黒人奴隷制問題がその影を落としていると仮定し、人種的な観点からこの作品に考察を加えてみたい。その過程で、Melville が Hawthorne の黒人奴隷観をどのように捉えていたのかを検証したい。

アメリカン・ゴシックと「不気味なもの」

青山学院大学教授 折島正司

アメリカ小説の歴史はゴシック小説の歴史だという Leslie Fiedler のような意見がある。もしそうなら、メインストリームのアメリカ作家たちの中にアメリカン・ゴシックの系譜に属するとされる者がたくさんいるのは、ふしぎなことではない。Charles Brockden Brown, Poe, Hawthorne, Melville, James, それに Faulkner。

アメリカの小説をゴシックにした一因が、ピューリタンの伝統、フロンティア（とインディアン）、奴隷制（と黒人）、政治的理想主義（とその不安）などのアメリカの歴史的現実にあるとすることもできるだろう。鮮やかに黑白二元論的なわりに曖昧で、ことさらに暴力的なこれらの小説は、まぎれもなく輝かしい理想を掲げつつ、自分でないものを殺戮し、放逐し、暴力的に支配し、排除し、そしてなれば忘却と抑圧に成功して自分の像を作り上げ、一安心はしたものの半分は不安、といった顕著な歴史的事態について語っている。

そういうことは、アメリカ人だけがしたことではまったくないが、アメリカ人がはっきりと大規模にしたことだ。

だが、自分というものや存在ということのもっと普遍的な不安なありかたにつながる側面もアメリカン・ゴシックに見出すことができる。それは、何かと何か似ている、それも多くは何ひとつ理由もなく似ている、というモチーフの反復に関わっている。

似ているというのは、ふつう、見た目は近いが正体は違うというようなことにすぎない。だが、気持ち悪いほど何度もそれが繰り返されるときには、見た目はそのつど多少は違うが、ある意味ではまったく同じものが反復している、のではないかと思われてくる。同じであって、同じではないということだというような気がしてくる。そうなると、排中律の働かない妙な領域をかすめているということになる。

絵画と登場人物の類似のエピソードを中心に、Hawthorne, James や Brown を例にとり、「不気味なもの」とのゆかりの深いこうした反復のお話をしてみたい。

極西部時代と Mark Twain

島根大学名誉教授 市川 博彬

Samuel C. Clemens、後の Mark Twain は 1861 年南北戦争が始まるとまもなく、ミシシッピ川のパイロットの仕事をつづけていられなくなり、おりしも兄 Orion が Lincoln の政府によってネヴァダ準州の長官(Secretary)に任命されたのに同行して、“the Far West”に向かう。26 歳、決して若すぎるとい年齢ではないが、社会全体が若く沸きかえっており、ことにゴールドラッシュ以降の極西部では、人はだれも過去の経緯にとらわれることなく、今ある現実にとどれだけ対処できるか、運を含め実力だけが問題だった。

パイロットになるのは Sam の少年時代からの夢だった。それなりの努力をして実現させたのだったが、思いがけず長逗留になった新天地 “the Far West” での生活は、彼をどう変えたのだろうか。われわれはその結果についてはよく知っている。5 年半後、31 歳でサンフランシスコを発つ彼は、すでに Mark Twain と名を変えて、プロの作家としての意識に燃え、東部の確立した社会で「文人」として認められることを求めたのだった。文壇の大御所 Howells から「アメリカ文学の Lincoln」と呼ばれるまでになるのだが、作家 Twain の胚胎は、実にこの極西部時代にあったといえる。

Twain は、ネヴァダ、カリフォルニア、さらにその西の当時サンドウィッチ諸島と呼ばれたハワイを含め、極西部で出会った現実を *Roughing It* (1872) でつぶさに語っている。冒頭で、旅に出る前から「インディアン、砂漠、銀塊」が夢に出てきて、3 ヶ月の予定が「6、7 年という異様に長い」ものになった、という 実際には 5 年半だから、誇張の中にさまざまな経験をしたという彼の実感がこもっている。

今回のシンポジウムでは、5 人が 5 人の視点で Twain の経験を検証する。発題の後で相互に関連する議論が出来ればと願っている。

テーマで挙げた「極西部」について、Twain 自身の語彙から敷衍しておく。*Autobiography* で、父親が 1835 年に一家をまとめて西に移住した先ミズーリ州のフロリダが、当時の “the Far West” であった。また *Life on the Mississippi* ではずっと昔に遡って開拓のごく初期のころ、アメリカにやってきたスペイン人、イギリス人、フランス人は、インディアンたちから「はるか西の彼方にある大河 (the great river of the far west)」について聞かされたという。これらをまとめていえば、“the Far West” は Twain の語彙の中では、その地で生まれ、少年時代の夢を実現し、ついには作家たる自分の胚胎した地ということになる。

ダブル・クロス・ゲーム

——1860年から1869年の Samuel L. Clemens

福井大学 辻 和彦

Mark Twain が極めて俊敏で器用な人物であったことは間違いない。彼はその経歴の始点において、二つのアクロバティックな転回を成し遂げている。一つは、主に政治的なポジションであり、南部社会／文化の影響を強く受けて育ち、やがて南北戦争で南軍側の兵士となったはずの彼が、僅かな時間で北部社会に溶け込み、その一員となっていることである。二つ目は職業的な位置付けであるが、極西部で新聞記者として着実にキャリアを積み上げていた彼が、ハワイ取材とヨーロッパ・地中海沿岸の旅を境に、東部社会で作家として大きく成功し、やがてその地で結婚して家庭を構えるに至ったということである。

このように Twain は南から北、西から東という「クロス」を渡り切り、やがて十九世紀後半のアメリカ文学を代表するような作家に成長するのだが、彼の伝記的資料を漁ると、必ずしもその卓越した個人的才能だけに頼ってこの偉業を成し遂げたわけではないことが分かる。Twain は南北戦争半ばに故郷を離れ、兄に付いて極西部へと向かうのであるが、彼が極西部についてから比較的容易に様々な人と親交を深め、新聞記者の仕事の幅を広められたのには、それなりの理由があった。Twain には、中西部で蒸気船パイロットをしていた時に作った「人脈」があり、それが極西部時代に大いに彼を助けることになるのである。

またその同じコネクションがやはり、ハワイ旅行とヨーロッパ・地中海沿岸旅行という転機を作り出すのに、Twain にとって非常に大きな助力となった可能性も指摘できるし、またその後の彼の作家人生において様々な意味で援助や救済の手となったこともありうる。本発表ではひとまず南北戦争勃発前年の 1860 年に遡り、彼がいかにしてこうした「人脈」を築き、そしてそれを利用して成功への階段を上っていくことになったかを探っていこうと思う。また彼が単にそうした人間関係を利用したのみにとどまらず、そこから様々な思想やアイデアを得て、自らの作品に生かしていったことについても触れられればと考えている。

Roughing It 試論

——笑いの変質と exile の想像力

山陽女子短期大学 水野 敦子

Thoreau の “Walking” (1861) には、西 へのまなざしの下、社会の一員よりは自然の一部たらしんとする人間の生き方を披瀝する想像力が面目躍如としている。その人間は聖地に赴く者、“a Sainte-Terrer” である。しかし、それは、語源的には “sans terre”、すなわち、国もなく、故郷もなき者だと Thoreau は述べる。彼は聖地に赴く者を特別な故郷はないが、あらゆるところに故郷を見出す者と捉えているのである。彼の生は「野生」と一致し、彼が一番生きているとき、最も野生なるときなのである。断固と文明を切り捨てる Thoreau の態度は鮮やかである。

Thoreau が東から西への野生の生を説いている間、Twain は、*Roughing It* (1872) にあるように、“hero” たらんとしてネバダの銀鉱に赴いた。しかし、主人公・語り手はその放浪癖故に、幻滅したカリフォルニアからハワイ諸島に渡り、また、アメリカに戻る。作品結びのモラルに「才覚があれば郷里に、なければ故郷を離れよ」とあるが、このモラルは資本主義の極西部と楽園のハワイ諸島の経験から得られたものである。当初の熱い “hero” 像は消えうせ、ハワイ帰還後の語り手の笑いは明らかに変質している。

そこで、本発表では、*Roughing It* から笑いの不発を如実に示す四つのエピソード 1) Arkansas をめぐるもの、XXXI、2) time and the country を示すもの、XLVI、3) change 願望、LV~、4) キリスト教文明対自然を示すもの、LXVII~、などを分析し、Twain の exile の想像力を明らかにする。「筏ほどいい家 home はない」と決めこむハックの姿を彷彿とする Twain のカリフォルニア観が彼の想像力の示すところであるが、そのカリフォルニア文化表象とハワイ諸島のメタファー との間に立って、前者を正当化できない自然を発見したプロセスを辿っていきたいと思う。

Twain の自己発見は Evans の言う “the cultural overdetermination of U.S. Nature as the province of white men”(Mei Mei Evans, 181-193, 2002) というアメリカの欺瞞を発見したことである。その発見はあの有名な “It was wonderful to find America, but it would have been more wonderful to miss it”(Pudd'nhead Wilson's Calendar) に直結する笑いの変質である。本発表では、更に、以上の笑いのプロセスを作品に頻出する言葉である circumstances と home という側面からも分析してみたい。即ち、笑いをリアリズムの問題として検討していきたい。

以上の分析から Twain 初期作品においてすら Thoreau の徹底性を貫徹できなかった Twain の文明と自然に棹さした “exile” の想像力の特徴を、笑いとリアリズム両面から捉えることができればと思っている。Thoreau の徹底ぶりと比べて、故郷を求める Twain の緊張の強度は一層烈しいものであった。

Mark Twain の初期作品について

——ジャーナリストから作家へ

大宮 健史

南北戦争によりミシシッピ川の水先案内人をやめざるをえなかった Mark Twain はネバダで一攫千金目当ての金銀の鉱脈探しを経て、ジャーナリストとして再出発した。1862年より the *Virginia City Territorial Enterprise* にスケッチを次々と発表した。1863年2月に発表されたスケッチで、Mark Twain のペンネームが初めて使用された。その後、Twain はサンフランシスコへ移り住み、スケッチの発表の場を the *San Francisco Call* や the *Californian* 等に広げつつ、次第に文学的志向を強めた。この時期の多彩な人脈の中で、Artemus Ward や Bret Harte との交友は Twain が文学や講演に深く関わる契機となる。1866年、the *Sacramento Union* から派遣されたハワイで、さらに、1867年、the *San Francisco Alta California* との契約によるヨーロッパ、聖地への旅行で Twain は旅先から通信文を書き送り続けた。

シンポジウムでは、1860年代、極西部ネバダとカリフォルニアでのジャーナリストとしての活動が文字通り Twain の文学的基盤であり財産となっていることを確認したい。Twain がジャーナリストから作家へ変貌しつつある時期に書かれた前述のスケッチ群において、バーレスク、パロディ、ホークス、誇張、洒落などユーモアという文学的鉱脈につながるありとあらゆる手法が試みられている。そのような中で、例えば、ユーモア作家 Twain の名を東部にも知らせた *Jim Smiley and His Jumping Frog*(1865)を取り上げ、執筆の背景を探りつつ、Twain の作家としての特質を論じる。また、スケッチ群の素材やそこで試みられた手法がどのように *The Innocents Abroad*(1869) , *Roughing It*(1872) , *A Tramp Abroad*(1880)等の後の作品に活かされているのかを探求する。

金と権威と書くことと

——初期作品における書くことの重要性

京都光華女子大学 和栗 了

Mark Twain は終生書くことが好きだった。生前に出版された著書は 30 冊を超え、現在出版されつつある書簡集を加えると 50 冊近い著作を残した人物である。15 歳から書き始め、“Mark Twain”として書き始めたのが 27 歳、1910 年に亡くなるまで 60 年以上の物書きとしての生涯を送った。

Twain はいつの時代にも権威や権力を題材にした。彼は権威を傘に着た人物を嘲笑し、権力者の無法な行為を攻撃した。

同時に Twain は権威と金を求めた。社会的成功を最優先し、それぞれの時代にそれぞれの場所で権力者との交友を大切にし、オックスフォード大学名誉博士号を喜んで受けた。成功した文化人としては当然の姿だった。

今回のシンポジウムでは、西部と極西部の環境の中で成功を求めて書くことと権威や権力とが Twain の中でどのように結びついていたのかを論じたい。

語ること、特に講演は Twain にとって重要であった。自分の評価も成功も講演料という金によって直接に確認できた。彼の語りの巧さは疑いようがないし、語りの場を意識した作品を初期の頃から書いている。彼は、語ること、聴衆を前にして演ずることの楽しさを体験し、かなりの講演料を手にしていった。極端な言い方をすれば、語れば金がいり、書けば権威を手にする、という時代だった。

だが、それでも Twain は書くことを楽しむ作家だった。あるいは書かずにはいられなかった。彼は講演で現金を手にするより、書くことを本業として選んだ。その選択の過程を追いながら、Twain の初期作品の面白さを論じたい。

サムからマークへ：作家トウェインの誕生

島根大学名誉教授 市川 博彬

サミュエル・クレメンズは、1863年2月3日付の Enterprise 紙に載せた署名記事“Letter from Carson City”ではじめて Mark Twain のペンネームを使った。「文人 (literary man)」トウェインの誕生を記録するものとして捉えておく。ネヴァダに来て1年半、『エンタープライズ』の記者であり、ちょうどこのとき主筆の Dan De Quille が休暇中で、その間彼の代理をしていた事もあって、作家/ジャーナリストのトウェインは大いに張り切っていたところであった。

以後、彼は公的活動の中では違和感なくこの響きの良いペンネームを使い、作家としての地歩を固めていく。ときに勢い余って私人であるべき場面、例えば母宛の手紙の末尾に、SamではなくMarkと署名していることがある。いったんSamとしたのを消してMarkに直したBowen宛の私信もある。間違いや書き直しの裏の事情を知る事で、トウェインが作家としての地歩をどこまで固めたかを測る一つの手掛りにならないか。東部の文壇で“a member of the literary guild”(The Turning Point of My Life)としての承認を得ること、これが極西部を去るときのトウェインの願いだった。サンフランシスコをたつ前日に書いた母宛の手紙には、間違いなくMarkの署名があった。

より本質的な問題は、トウェインがどんな作家になろうとしたか、何を書こうとしたかである。これを考えるとき大きな手掛りを与えてくれる1本の手紙がある。1865年10月19日および20日の日付で兄オリオンにあてた手紙である。

「文学が自分にとって天職だ(a “call” to literature)」ただし、とすぐ後続けて、「文学と言っても低俗なもの ユーモア文学だ。誇るべきものは何もないけれど、自分にはそれがいちばん適している。」

諧謔をこめて自分の将来像を示したこの手紙は、Angel’s CampでBen Coonから聴いた“Frog”を、語りにこめられたユーモアを苦労して保持し、文章化し、完成した原稿を東部で待つArtemus Ward宛に発送した直後に書かれたものだった。語りの文学もまた、「耳の作家」であるトウェインに「いちばん適した」ものであるに違いない。彼が極西部で見つけたもう一つの資質、講演者(lecturer)としての自分については、このあと、1886年の春から夏にかけて経験したサンドウィッチ(ハワイ)諸島にふれなければならぬだろう。

中・四国アメリカ文学会

平成 17 年度活動報告

(平成 17 年 4 月 ~ 平成 18 年 3 月)

【平成 17 年】(2005 年)

『中・四国アメリカ文学研究』第 41 号発行(6 月 1 日)

『中・四国アメリカ文学会会報』第 44 号発行(6 月 1 日)

中・四国アメリカ文学会第 34 回大会

日時 平成 17 年 6 月 11 日(土)、12 日(日)

場所 広島修道大学 5 号館 1 階 5102 教室

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東 1 丁目 1-1 (tel. 082-830-1163)

第 1 日 6 月 11 日(土)

中・四国アメリカ文学会 平成 17 年度役員会 (11:00? 12:20)

開会式 (12:20 ~ 12:30) 開会の辞 会長 田中 久男

研究発表 (12:35 ~ 16:45)

1. Why Don't You Drink?

——Carver におけるアルコールとジェンダー・アイデンティティ

(12:35? 13:15) 司会 北星学園大学 上西 哲雄

発表 広島大学(院) 栗原 武士

2. 『七破風の屋敷』における語り手とホールグレイブの情報操作

——畏にはめられたピンチョン判事

(13:15 ~ 13:55) 司会 松山東雲女子大 中山 慶治

発表 岡山大学(院) 藤沢 徹也

3. フィリップ・ロスの『ヒューマン・ステイン』における解体の構図

(13:55 ~ 14:35) 司会 ノートルダム清心女子大学 広瀬 佳司

発表 広島女学院大学(非) 平田 ユミ

(休憩 10 分)

4. Paul Auster, *The New York Trilogy* における

ポスト産業化社会の都市空間の位相

(14:45 ~ 15:25) 司会 広島大学 新田 玲子

発表 鈴鹿工業高専 日下 隆司

5. *The Sound and the Fury* における Faulkner の語りの技法

(15:25 ~ 16:05) 司会 佐賀大学 早瀬 博範
発表 比治山大学 重迫 和美

6 .Borg と Trill——The Next Generation 以降の Star Trek シリーズ
からみたアメリカ SF における混成体表象の変遷

(16:05 ~ 16:45) 司会 広島大学 島 克也
発表 尾道大学 小畑 拓也

特別講演 (17:00 ~ 18:00)

講師 志村 正雄 氏 (東京外国語大学名誉教授・鶴見大学名誉教授)
演題 James Merrill : *The Changing Light at Sandover*(1982)について
司会 林 康次 氏 (愛媛大学)

懇親会 (19:00 ~ 21:00)

会場 メルパルク広島
〒730-0011 広島市中区基町 6-36 (tel. 082-222-8501)
司会 今石 正人 氏 (修道大学)
会費 6,000 円

第 2 日 6 月 12 日 (日)

シンポジウム (9:30 ~ 12:30)

ソローとカウンター・カルチャー——その多文化的様相をめぐって
司会 松島 欣哉 (香川大学)
1. ソロー文学の射程 発題 香川大学 松島 欣也
2. 『ウォールデン』結句の多文化と現代 発題 福岡大学 塩田 弘発
3. *Walden, or Life in the Woods* におけるソロー衣服観と現代のアメリカの
自然派ファッション——対抗文化のファッションとの関わりから
発題 宇部工業高専 福屋 利信
4. ソローとカウンター・カルチャー再考
——『ウォールデン』のマイノリティを中心に
発題 広島大学 伊藤 詔子

総会 (12:30 ~ 2:50) 議長 会長 田中 久男
閉会式 (12:50 ~ 3:00) 閉会の辞 副会長 林 康次

「News Letter」第 70 号発行 (2004 年 8 月 10 日)

第 1 回支部編集委員会 (書評会議)

日時 : 2005 年 9 月 10 日 (土) 12 : 30 ~ 3 : 30
場所 : 広島大学大学院文学研究科 小会議室

出席者：加藤、吉岡、松島

秋季研究会

日時： 9月10日（土曜日）14:40～7:00

場所： 広島大学大学院文学研究科 大会議室（1階）下記地図参照
東広島市鏡山1-2-3 （tel. 082-424-6684）

中・四国アメリカ文学会 支部運営委員会 13:30～4:40

[研究発表]

1. 発表者：本田 良平 氏（広島大[院]）14:40～5:20

題目：Faulkner 文学と時間? *The Sound and the Fury* 第2節を中心に

司会者：大野 瀬津子 氏（九州工業大）

2. 発表者：山下 育美 氏（女学院大[院]）15:20～6:00

題目：1950年代アメリカと禅

——Jack Kerouac の *The Dharma Bums* を中心として

司会者：濱口 脩 氏（広島大）

「News Letter」第71号発行（2004年11月1日）

冬季研究会

日時： 12月3日（土曜日）14:30～6:50

場所： 場所： 安田女子大学8号館 8201号室（2階）
広島市安佐南区安東6-13-1 （tel. 082-878-6321）

中・四国アメリカ文学会 支部運営委員会 13:30～4:20

[研究発表]

1. 発表者：三重野 佳子 氏（別府大）14:30～5:10

題目：マラマッドにおける父と子の関係

司会者：新田 玲子 氏（広島大）

2. 発表者：福屋 利信 氏（宇部工業高専）15:20～6:00

題目：70年代における対抗文化の行方

司会者：小野 紳一郎 氏（松山東雲女子大）

3. 発表者：田中 健二 氏（摂南大）16:10～6:50

題目： *A Good Man Is Hard to Find* と *Tom Dooley* における死

——アメリカ南部作家 Flannery O'Connor の作品と

フォークソング歌詞の考察

司会者：森田 勝治 氏（広島修道大）

*忘年会 17:30-19:30

とりあえず吾平（大町店）

〒731-0124 広島市安佐南区大町東 3-1347 (tel. 082-830-5555)

【平成 18 年】(2006 年)

「News Letter」第 72 号発行 (2005 年 1 月 31 日)

第 2 回支部編集委員会（論文審査他）

日時：2006 年 2 月 11 日（土）13：00～8：00

場所：愛媛大学法文学部人文学科 英語文化実験室 B

出席者：加藤、吉岡、横田、松島

第 3 回支部編集委員会（編集会議）

日時：2006 年 3 月 18 日（土）12：30～4：30

場所：広島女学院大学ソフィア 2 号館 103 教室

出席者：加藤、吉岡、横田、松島

春季研究会

日時：3 月 18 日（土曜日）14:30～7:10

場所：広島女学院大学 ソフィア 2 号館、101 教室

732-0063 広島市東区牛田東 4 丁目 1 3 番 1 号 (tel. 082-228-0386)

中・四国アメリカ文学会 支部運営委員会 13:00～4:20

[研究発表]

1 . 発表者：川上 美幸氏（安田女子大[院]）14:30～5:10

題目：T . ウィリアムズの *Cat on a Hot Tin Roof* における

二つの三幕について

司会者：加藤 好文 氏（愛媛大）

2 . 発表者：金丸 敏志（広島大[院]）15:20～6:00

題目：*Beloved* における逃亡奴隷の表象

司会者：濱口 脩 氏（広島大）

3 . 発表者：上西 哲雄氏（北星学園大）16:10～6:50

題目：ハックの宗教

司会者：林 康次 氏（愛媛大）

中・四国アメリカ文学会会則

(名称)

第1条 本会は、中・四国アメリカ文学会(The Chu-Shikoku American Literature Society)と称し、事務局を事務局幹事長の所属機関に置く。

(目的)

第2条 本会はアメリカ文学の研究を行い、その成果の発表をつうじ研究水準の向上をはかり、あわせて内外学会との交流をはかることを目的とする。

(性格)

第3条 本会は日本アメリカ文学会に加盟し、その中・四国支部となる。

(会員の資格)

第4条 第2条の主旨に賛同する者は会員1名の推薦により会員になることができる。

(事業)

第5条 本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 大会および研究会の開催
2. 会誌および会報の発行
3. その他必要と認められる事業

(会費)

第6条 本会の会費は年額4,000円とする。ただし、学生会員は年額3,000円とする。

(役員)

第7条 本会に次の役員を置く。

会 長 (兼支部長)	1 名
副会長	1 名
評議員	若干名
幹事長	1 名
幹 事	若干名
支部運営委員	若干名
会 計	1 名
監 事	2 名
支部編集委員	若干名
本部代議員	3 名
本部大会運営委員	1 名

1. 会長は本会を代表し、会務を総轄する。会長の選出は評議員の互選による。
2. 副会長は会長を補佐する。副会長の選出は評議員の互選による。
3. 評議員会は本会に関する重要事項を審議し決定する。評議員は総会において選出する。評議員会は必要に応じて他の役員を加えることができる。
4. 幹事長は会長の統轄のもとに幹事、そのほかの役員と協力して本会の会務を執行する。幹事長、幹事は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
5. 支部運営委員は、大会、研究会等支部の運営を補佐する。支部運営委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。支部運営委員会は、会長、副会長、幹事長、幹事、会計、支部運営委員で構成する。
6. 会計は本会の財政を執行し、監事はその執行状況を監査する。会計ならびに監事は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
7. 支部編集委員は機関誌の編集を行う。支部編集委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
8. 代議員、本部大会運営委員、本部編集委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。

(役員 の 任期)

第 8 条 役員 の 任期 は 2 年 と し、再任 を 妨げ ない。た だ し、会 長、代 議 員、本 部 大 会 運 営 委 員、本 部 編 集 委 員 の 任 期 は 2 期 4 年 を 限 度 と す る。な お、本 部 の 会 長 ま た は 副 会 長 の 任 に あ る 代 議 員 は、重 任 す る こ と が で き る。

(顧 問)

第 9 条 本 会 は 顧 問 を 置 く こ と が で き る。顧 問 は 評 議 員 会 の 承 認 を 経 て 会 長 が 委 嘱 す る。顧 問 は 重 要 事 項 に 関 し て 評 議 員 の 諮 問 に 答 え る。

(総 会)

第 1 0 条 本 会 は 原 則 と し て 毎 年 1 回 総 会 を 開 く。

付 則

この会則は、昭和 53 年 4 月 1 日から施行する。
この改正会則は、昭和 60 年 7 月 1 日から施行する。
この改正会則は、昭和 62 年 6 月 28 日から施行する。
この改正会則は、昭和 63 年 6 月 26 日から施行する。
この改正会則は、平成 4 年 6 月 21 日から施行する。
この改正会則は、平成 7 年 6 月 25 日から施行する。
この改正会則は、平成 9 年 6 月 23 日から施行する。
この改正会則は、平成 15 年 6 月 15 日から施行する。

編集後記

- * 『会報 No.45』をお届けします。「中・四国アメリカ文学会第 35 回大会」にご持参下さい。
- * 新入会員は以下の通りです。(順不同、敬称略)
石崎 一樹、林 達也、黄 峻、池田 幸恵、平野 温美、西藤 光代、古川 晃子、玉中 利文、坂根 弘子。
- * 退会者は以下の通りです。(順不同、敬称略)
福尾 奏平、南波 辰朗、田坂 崇、氏田 雅子。
(ただし、上記退会者以外にも、会費の 3 年間未納などの事情により、会員名簿から削除されている場合があります。)
- * 平成 18 年度支部大会及び全国大会で発表なさる会員の皆様のご健闘をお祈り致します。また、司会の先生方には大変お世話になりますが、どうぞ宜しくお願い致します。
- * 中・四国アメリカ文学会の会員数は、平成 18 年 4 月現在で 196 名です。皆様のお近くで入会希望の方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡下さい。また、会員名簿に脱落、誤記、その他お気づきの点がありましたら、併せてご一報下さい。
- * 事務局を担当して三年が過ぎ、少々息切れしてきました。二期目の任期半ばであります。今回、田中会長が辞意を表明されていることもあり、この機会に事務局も交替して頂こうと考えております。
三年間幹事をやって、感謝にたえなかったのは、学会運営に積極的に関わり、学会開催のみならず、発表に前向きに取り組んでくださる方々が多数いらしたことです。また、住所変更通知、会費納入、懇親会の参加通知など、事務局を煩わせることなくやってくださった会員のひとりひとりに、深く御礼を申し上げたいと思います。
個人個人にとっては些細な遺漏も、それが集中する事務局には大変煩雑な手数になります。当学会はすべて会員のボランティアで運営されており、事務局の面々は皆、それぞれの大学の仕事を抱えた上で学会事務を無償で行っております。どうぞその点を心に留め、今後も会員ひとりひとりが責任を持って学会を支えて下さるよう、宜しくお願い申し上げます。
最後になりましたが、本学会の益々の発展と皆様の御健勝をお祈り申し上げます。

幹事長 新田 玲子

中・四国アメリカ文学会会報 No. 45

The Chu-Shikoku American Literature Society
Bulletin No. 45

2006年6月1日発行

発行者 中・四国アメリカ文学会
代表者 会長 田中 久男
事務局 (2006年6月12日をもって事務局が変更予定です。
新事務局についてはURLでお確かめ下さい)
広島大学大学院文学研究科 新田研究室
〒739-8522 東広島市鏡山 1-2-3
広島大学大学院文学研究科
Tel. & Fax 082-424-6684
e-mail reinita@hiroshima-u.ac.jp
URL: <http://www.chushi-als.org>

振替 01380-0-22492

作製 中・四国アメリカ文学会事務局

印刷 ニシキプリント

〒739-2117 東広島市高屋台 2 丁目 1-12 Tel. 082-434-6954
